

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652061

研究課題名(和文) ジャンルとしてのファンタジーの可能性 『指輪物語』は支配的なテキストか

研究課題名(英文) The Possibility of Fantasy Literature - The text of The Lord of the Rings is dominant?

研究代表者

渡辺 美樹 (Watanabe, Miki)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：90201235

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：王権神話における王と道化の関係を軸にして作り上げられたファンタジー『指輪物語』はファンタジー文学の嚆矢であるばかりがジャンルの支配的なテキストとして存在している。架空の世界を構築するファンタジーのジャンルの特徴として、対立する概念をすり抜ける存在を主人公に持つ必要がある。また特に王権神話にまつわる物語の場合には王権の起源への回帰を果たすことで読者に慰めや郷愁を与えたりするという特徴を持つ。

研究成果の概要(英文)：J.R.R.Tolkien's mythical being the hobbit first appeared in his novel of that name. Described as a creature about half the height of a human, with neither magical powers nor special abilities, the hobbit is presented as the most powerless creature in Middle-earth. It is precisely this apparent weakness that affords the hobbit, functioning as the fool, to serve the future king and quest narrative. The Lord of the Rings is a work that Tolkien to some extent created by adapting the epic poem. That is the reason why it is dominant in the genre of fantasy literature.

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：文学理論

キーワード：ファンタジー ジャンル 道化

1. 研究開始当初の背景

文学の歴史の中でファンタジーはロマンス(空想的な大衆小説)であるとして除外視されてきた。元来文学作品とは韻文で書かれた作品であり、叙事詩こそが文学のそのものであった。近代になって文学は韻文で書かれた劇や詩から散文で書かれた小説へと比重をシフトしてきたとはいえ、実際には特に草創期の小説は、詩や劇ほど文学的であるとは見なされていない。小説が文学的かどうかを判断する基準は、物語が現実をいかに写しだしているかという点に、すなわちミメシスにあった。その基準にあわないものは文学作品ではなく、ロマンスであると判断されて文学批評の対象にはされなかった。ファンタジーとは、文学の本来の定義から最も遠い所にある。

かくしてファンタジーは文学作品ではないとして文学から排除されてきたのであるが、その最も文学的でないファンタジーは、最も文学的な叙事詩を模倣(ミメシス)することで生み出されたものである。叙事詩とファンタジーとは、後者が想像上の国に関する散文の物語であるという相違点があるし、想像上の国の叙事詩的過去を語るに際して現実批判が入り込んでくるという側面がある。それでも尚、ファンタジーは叙事詩を模倣していると言わざるを得ない。ミハイル・バフチンのいう叙事詩の特徴を踏まえた物語世界を描出するからだ。文学から他者性を押しつけられて排除されてきたファンタジーというジャンルが、最も文学的とされてきた叙事詩のジャンルに最も近接するという、相反するものの一致が起きているのである。

さらにファンタジーはもう一つ別な意味で文学から排除されてきた。1969年にアダルト・ファンタジーという言葉がわざわざ作り出されたことからわかるように、そもそもファンタジーとは、大人向けではなく子ども向けの読み物であると考えられてきた嫌いがある。『ガリバー旅行記』や『ロビンソン・クルーソー』が子どもの本棚に入れられてしまった例を考慮すればわかるように、ファンタジーは空想的であるという理由で児童文学という枠組みの中に入れられてきたのだ。つまり児童文学は文学とは別個のものともみなされていたということになる。すなわち「児童」文学は文学に対して有標の記号である。さらにファンタジーは児童文学の中でも無標のリアリズム文学に対する有標の記号である。従ってファンタジーは二重に差別化されているのである。

今現在ファンタジーは、リアリズム文学の対極にあるものとして漠然と受けとめられているだけで、実際のところ、そのジャンルの定義は明確ではない。日本語で幻想文学と銘打たれた場合には、ツヴェタン・トドロフに倣って驚異と怪奇の境界線上に位置する

ものとしてとらえられることが多い。文学的でないと目された小説がすべてファンタジーの領域に入れられているのが現状である。

そのような現状の中で J.R.R. トールキンの『指輪物語』(1954-55)はファンタジーというジャンルの嚆矢となるものである。というのは、作者本人は「フェアリー・ランド」にあるものとして自分の作品を位置づけしていたが、リン・カーターが巻き起こしたアダルト・ファンタジー・ブームによって『指輪物語』に類する作品がファンタジーと目されるようになったからである。ブルームの『影響の不安』の中で言及される「支配的なテキスト」に『指輪物語』はまさしく該当する。そこで、この作品と他のファンタジー作品との影響関係を考えることで、ファンタジーというジャンルがいかに構築されてきたかを明らかにすることができる。

2. 研究の目的

本研究は、現代ファンタジー文学の嚆矢でありこのジャンルの「支配的なテキスト」である『指輪物語』の特徴を明らかにすることによって、ファンタジーというジャンルの特徴を示すと同時に、このジャンルの限界を明らかにすることを目的とする。

『指輪物語』の特徴としては、まず王権神話における王と道化の関係を物語の枠とするという物語上の特徴がある。小人であるホビットが王に仕える道化として善と悪を自由に行き来し、最終的に悪を倒すことで王の復権を可能にする物語であるからである。歴史上侏儒は小人という「グロテスクな身体」を活かして宮廷で王に「悪魔の凶眼避け」として仕えてきた。侏儒は王の限りない絶対性の影の部分を引き受ける存在であるといえる。よって、小人の主人公フロドが、王家が犯した過ち、すなわち邪悪な指輪を破壊せずに自らのものとした王家の始祖の過ちを償うために、指輪を破壊する旅に出かけるのである。

次に、対立する概念をすり抜けることができるような存在を物語の主人公兼視点人物に持つという特徴が挙げられる。旅に出るのは自分たちの村から一步も外に出たことがないホビット族であるので、読者にとって視点人物がホビット族であると物語世界に自己導入しやすい。

さらに、王権の起源への回帰を果たすことを通して読者に慰めを与えているという点もこの物語の持つ特徴である。ジャンルの限界は王権神話が脱構築できない点にある。

3. 研究の方法

ファンタジーのジャンル論を展開する場合、異世界の時空間がどのように描かれているのかを手がかりにして論じられることが多い。しかしながら、その異世界を読者に知

らしめる役割を負っているのは登場人物であるから、主人公に焦点をあてて、ジャンル論を構築することも可能である。ロトマンの物語論によれば、主人公となる人物は二項対立概念をすり抜けるという特徴を持つ。そこで、『指輪物語』の中で視点人物として登場してくるホビット族が有する道化としての特徴がいかに他の作品に影響を与えていったのかを考察していく。その結果、道化こそは、自らのうちに他者性を有するゆえに相反するものの境界を越境できる存在となり得るという点で、ファンタジー文学には不可欠の存在と結論づけられる。

本研究では、道化としてのホビット族の特徴を鮮明にすることで、ファンタジー文学のジャンルを確立したトルキンの「中つ国」のもつ意義を探求し、他のファンタジー作品との比較を行うことでファンタジーというジャンルの定義を試みる。それに関して、著者トルキンが英国には建国を謳った叙事詩が存在しないという悲しむべき事実を憂えてこの作品を創り出したと語っていることを考えると、この作品が叙事詩や牧歌の領域に近いものとして構想されたことがわかる。よって、ミハイル・バフチンのいう叙事詩の特徴を『指輪物語』に援用することでジャンルの定義を行える。またあるべきものがないという作者の悲嘆には牧歌様式の特徴が現れているので、作者を読者の一人としてみなしうることから、ファンタジーの読者論の中にその要素を取り入れることで、ファンタジーのより明確な定義が可能となる。

4. 研究成果

ミハイル・バフチンによれば、ジャンルとしては未だに生成途上と見なされている小説は、先行する小説のみならず他のジャンルを取り込むことで、新たな形式を作り上げてきたという。この視点からみれば、ファンタジーという新しい形式の小説『指輪物語』は、トルキンが叙事詩を換骨奪胎して「準創造」したものと言える。古英語の専門家であるトルキンにとって叙事詩は研究対象であると同時に創作対象でもあった。まず先人の示す叙事詩的特徴から『指輪物語』と叙事詩との関係を考えてみたい。叙事詩の特徴は、ミハイル・バフチンによると、1) 表現対象が国家の叙事詩的過去であること、2) その源泉が国民的伝説であること、3) その描かれる世界が絶対的な叙事詩的距離によって作者及びその聴衆の時代から分離されていること、の三つである。

『指輪物語』は、妖精の活躍する第三紀までの世紀から第四紀の人間の世紀へと移行する過渡期に起きた指輪戦争を物語っている。したがって表現内容としては国家の叙事詩的過去、すなわち絶対的な過去の出来事を物語っている。また物語の源泉は架空の地である Middle-earth の王権神話にある。王権神

話とは、正統の王子からの王権の篡奪、王子の苦難と放浪、そして復権へという経緯を物語る神話で、世界に広く分布する国民的伝説の一つである。さらにこの物語は王の道化フロドの書き残した歴史書に基づくものとされている。歴史書は読者との間に明確な時間的距離を置くものである。また『指輪物語』に補遺として付せられた年表では、本文中で語りきれなかった登場人物のその後の人生までが語られる。これは物語内世界が完結していることを示している。よってこの物語の世界は読者の世界とは隔絶されている。言い換えれば、現代の読者とこのファンタジーの物語世界の間には叙事詩的な距離が存在している。

このように、『指輪物語』はバフチンの挙げた叙事詩の特徴を全て備えている。またアウエルバッハによれば、叙事詩の語り手には一点の曇りもなく事実を明らかにしようとする衝動があるという。先に触れた補遺や冒頭の長い前置きは叙事詩の全てを明らかにしようという試みを全うするためにとられた手段と考えられる。

表現対象が国家の叙事詩的過去であることは、『指輪物語』の原点となったのがフロドの手稿を元にした写本『指輪の王の没落と王の帰還』であることから明らかである。この物語は、この写本の題名が示すように、指輪の王の滅亡と正統の王アラゴルンによる王国再興という二つのプロットから成り立っている。すなわち王の道化フロドが一の指輪を破壊することで指輪の王サウロンを滅亡させ、アラゴルンがゴンドールの王国を再興するまでの物語である。この物語はアラゴルン王の戴冠式で「9本指のフロドと滅びの指輪の物語」として謳われる。つまりアラゴルン即位の時点で早くもこの物語は国家的な伝説に仕立て上げられているのである。

アラゴルンはアーサー王やジークフリートのような英雄像として描かれている。つまり高貴な生まれにもかかわらず、最高権力者に疎まれて聖なる武器を携えて諸国を放浪する人物である。アラゴルンは、物語の始まりの時点では王権を回復しなければならない潜伏中の王子である。唯一の王位継承者であるが故に、彼は世界支配を目論むサウロンに命を狙われて、Strider という名の放浪者として正体を隠して登場する。彼は戦士として武勲に秀でているばかりか医術という一つの文化の担い手でもある。アラゴルンの優れた資質は優れた王の資格を示しているといえる。『指輪物語』が『ベオウルフ』のような叙事詩であれば、主人公は道化のフロドではなく、一際優れた英雄であるアラゴルンになるはずである。それでは、何故アラゴルンは『指輪物語』の主人公として選ばれなかったのか。

「叙事詩的な距離」において「叙事詩的過去」として語られる物語では人物像は理想化されている。描出される登場人物はその個性や

内面に立ち入って描かれることなく、現代の小説の理論ではフラットに分類される人物像となる。主人公の性格の本質と表面的な外見との間にさえ齟齬はない。絶対的な悪を表象するサウロンは赤い眼の悪魔であるし、善と悪を行き来することの出来る道化としてのホビット族は小人である。復権を果たすアラゴルンの風貌は王者らしい品格を備えている。このように、描き出される人物像の外見はその本性や行動と一致するばかりでなく、その人物に対する他者の視点（語り手の視点や読者の視点も含めて）とも一致している。言い換えれば、断じて変化することのない、いわば絶対的な類型として存在した人物像が語られる。そのために理想的な人物像、王者アラゴルンは、心の葛藤もない、平板な人物像にならざるを得なかったのである。文字通りに善悪を行き来する道化フロドが客観的には邪悪であっても主観的には「愛しいもの」である一指輪をかかえることができ、その葛藤故にラウンドな人物像つまり物語の主人公になることができた。つまり道化のフロドは王の「影」である邪悪な指輪を引き受けたことによって善悪の二面性を増強させ、心理的な葛藤へと発展させる。その二面性は従者のサムとゴクリへと受け継がれ、両者とも「引き裂かれるような思い」に苦しめられる。事実スメアゴル＝ゴクリは、指輪を手にする前のスメアゴルという人物と手にした後のゴクリという人物に分裂している。このようにホビット族は善悪を行き来する道化であるが故に心的葛藤をもつ、ラウンドな人物像として描写可能になったのである。この点がファンタジーというジャンルの持つ特色といえよう。

トールキン自身は、C.S.ルイスの「ナルニア物語」と自分自身の作品の類似性を意識していた。そのために1950年に『魔女とライオン』が出版された時にルイスとの関係を絶ったのである。ナルニアは現実の世界と平行する形で作られた点では異なっている。ナルニアという異世界の中に現実の世界から子どもらが入り込む形を取る。この形の異世界創造では視点人物である子どもに読者が自己投影をしやすいというメリットがある。またナルニアでは悪と関わり合いになる子どもエドモンドやディゴリーやユースティスーがナルニアに登場する。彼らが善と悪を行き来できる道化の役目を果たしているといえる。

また『秘密の花園』についていえば、この作品をファンタジー作品であるとして考えることができる。メアリやコリンの健康を回復させる庭園を奇跡の時空間として解釈できるからである。19世紀のヨークシャー地方の庭園は何故ファンタジー空間とみなされたのかを考えることでファンタジーの時空間についてより深い考察が可能になった。メアリが引き起こす奇跡は「薔薇十字」の秘法に基づいているからである。さらにその魔法

は大地を蘇らせるデメテルとペルセポネーの神話を下敷きにしているからだ。リアリズムの作品であっても通常ではあり得ない事柄が可能となればファンタジー作品と言うことは可能となろう。

マジック・リアリズムでは民話を換骨奪胎して新たな物語を作ったりする。アンジェラ・カーターの「野獣の求婚」のような作品もこの枠組みで考えることはできるのである。王権神話の枠組みではなく、民衆の結婚の物語だと考えれば、犬が道化役を務め、「美女」は換金された結果妻となったことになる。結婚の物語をファンタスティックに物語っている。ただし同種の物語と同じく静的な世界観を背景にしている。

ジャンルの限界としては、トールキンが主張したようにファンタジー文学の特徴が、読者が慰めを得ることにあるとするならば、物語作品の持つ世界観が二項対立的な静的な世界になる必要がある。物語の終わりで始めの静的状態に復帰することができて読者は解放感を得ることができるからである。『指輪物語』ではそれが王政復古の形で描かれている。道化の一族であるホビット族の犠牲があつて王の復権が可能になったのにもかかわらず、ホビット族は道化でとどまり続け、物語内の世界に変化がない。よって『指輪物語』の物語世界は静的な世界である。ファンタジーというジャンルが動的な世界観を持ち得ない可能性があり、それがジャンルの限界であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

渡辺美樹、「連鎖する物語『六の宮の姫君』」『児童文学論叢』18号、日本児童文学学会中部支部、2013年9月

〔学会発表〕(計 3 件)

渡辺美樹、「The Governess; Or, The Little Female Academy の語りについて」『日本イギリス児童文学学会会報』2011年秋季号 pp. 20-21.

渡辺美樹、「女子学生は Family なのか-The Governess; Or, The Little Female Academy について」『日本イギリス児童文学学会会報』2012年春季号 pp. 16-17.

渡辺美樹、「物語論の視点から『指輪物語』を語る」『日本イギリス児童文学学会会報』2012年秋季号 pp. 23-24.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 美樹 (WATANABE Miki)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：90201235

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：